

私がなぜ現在の科目を選んだか

「再生医学」

信州大学医学部再生医科学教室

門 田 真

私が臨床医になり、大学病院での内科研修を終えて循環器内科を選んだ理由は、出向した関連病院での経験にあります。そこで出会った循環器内科部長は、研修医にも気軽に心臓カテーテル治療に参加させてくださり、急性心筋梗塞患者が、劇的に治っていく現場に立ち会うことが出来ました。手技を覚えていく過程は単純に楽しく、同時に忙しい日々でした。しかし医師5年目頃になると、臨床だけでなく研究もしてみたいと思うようになり、その当時から注目を集めつつも未知の部分が多かった再生医学の分野に足を踏み入れることにしました。

京都大学大学院医学研究科に進学後は、医学部のみならず理学部や工学部など他分野と連携した医学研究に興味を持ち、物質細胞統合システム拠点において、再生医療応用に直結する研究ではなく、より基礎的な

私がなぜ現在の科目を選んだか

「小児科と遺伝医療」

信州大学医学部小児医学教室

米 川 萌

私は小児科専門医を取得後、現在大学院で遺伝医療の勉強をしています。遺伝という珍しい人だと思ふ方もいるかもしれませんが、私は遺伝子が大好きとか、ひたすら研究がしたいというわけではなくて、きっかけは医学部3年生の自主研究で遺伝医学教室に配属になったことでした。自主研究の時間の中で、古庄知己先生の外来に陪席させていただく機会がありました。まだ病院実習も始まっておらず、実際の外来の様子を見学するのは初めての経験でしたが、古庄先生の外来では基礎疾患のあるお子さんの定期受診が多く、患者さんも古庄先生もにこにこして和やかな雰囲気だったことが印象的でした。

その後、病院実習や初期研修で様々な科を回るとど

研究に取り組み、ヒトiPS細胞から作製した心筋シートを用い、不整脈出現のメカニズムを解析しました。研究の醍醐味は、思いついたアイデアを試行錯誤しながら実験によって検証できる点にあります。特に、ヒトiPS細胞から心筋細胞を初めて自分で分化誘導できたときや、巡回する興奮波の伝播を薬剤によって制御できたときには、心臓カテーテル治療を行うときと同様の興奮を覚えました。

その後、アメリカでの留学先を探している時に、現在の上司である柴先生に出会い、シアトルのワシントン大学を紹介いただきました。留学先ではラットやブタを用いた動物実験を主に行い、自ら移植した細胞が心臓内に残存していることを確認できた時には、驚きとともに興奮を覚えて、細胞移植治療による再生医療に関わる研究を現在も続けています。細胞や心臓におけるミクロな現象の積み重ねが、細胞の挙動・性質、さらには周辺環境の変化へとつながることを少しずつ明らかにしていく過程には、深い喜びがあります。現在に至るまでご指導・ご支援をいただいた全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。(京大平15年卒)

の科も魅力的でしたが、最終的には疾患を診るだけではなく、成長も一緒に見守っていけるところがいいなと思ひ小児科医になることを決めました。小児科ではNICUの赤ちゃんから思春期の中高生ままで、年齢も疾患も様々な患者さんを経験するなかで、発達障害の診療に関わる機会が多くありました。患者さんやご家族の抱えている困りごとに対して、話を聞いたり、一緒に上手く付き合っていく方法を考える時間がほとんどで、学生の頃に想像していた病気を治す医療とは全然違いましたが、意外と自分の性に合っているようでした。治療が(今はまだ)ないことも多いけれど、本人の向き合い方や周りのサポートでよりよく生活できることを目指すのは、遺伝医療との共通点だと思ひ、小児科専門医取得後のサブスペシャリティとして遺伝医学を勉強しようと決めました。初心を忘れず、患者さんから「ここに来てよかった」と思ってもらえるような医療を提供できるように、これからも日々研鑽を積んでいきたいと思ひます。(信大平31年卒)